

「赤い風船」を胸に



御卒業おめでとうございます。社会に船出する皆さんは、大いなる期待とともに一抹の不安を胸にしているかもしれません。

今から十年ほど前、白門祭に歌手の加藤登紀子が来たことがありました。九号館ホールのコンサートでした。加藤登紀子の歌は、私が学生だった四半世紀前にも聞いたことがありました。それは神田の駿河台に中大講堂があった時代です。そのことが懐かしくて、私も多摩校舎の九号館ホールに出かけました。

九号館ホールは、私の学生時代の中大講堂とは、まったく別世界でした。それでも加藤登紀子の歌の素晴らしさと独特な雰囲気は、昔と変わりません。彼女の歌を聞きながら、四半世紀前、中大講堂で彼女の歌った「赤い風船」に感動したことを思い出し

ました。学生時代の平和なひとときの思い出です。

ところが、コンサートの終わりごろになって、思いがけないことがありました。加藤登紀子が二十四年前に中大講堂で歌ったことを語ったのです。私が「赤い風船」を聞いた四半世紀前の話です。何百回となくコンサートを重ねたであろう歌手が、二十四年前の白門祭で歌ったことを語ったのは実に意外でした。

彼女の二十四年前の話にホールのあちこちから拍手が起き、最後は大きな渦になりました。学生ばかりと思っていたホール内にも、昔の中大講堂で「赤い風船」を聞いたのかもしれない世代が数多く目につきました。皆の心のなかに、二十四年前の学生時代が輝き続けているように思えたひとときでした。

中央大学で過ごした思い出は、皆さんにとって、かけがえない宝となるでしょう。頑張ってください。

文学部長
まつお
松尾 正人
まさひと